中原中也「月夜の浜辺」

七五調のリズムや表現技法・主題を解説

「月夜の浜辺」　中原 中也
この詩は、月が照らす静かな夜の浜辺で、「僕」がたまたま拾った一つのボタンに対して、なぜか捨てられない深い愛着や切なさを感じていく様子を描いた作品だよ。
ただのボタンを「自分自身の孤独や悲しみ」に重ね合わせるような、とても神秘的（しんぴてき）で幻想的（げんそうてき）な雰囲気が漂う名作なんだ。



© ゆみねこの教科書

「月夜の浜辺」の本文（詩の全文）

この作品は著作権の保護期間が終了しているため、詩の全文を掲載するよ。まずは詩全体を読んで、どんなリズムや情景が浮かぶか味わってみよう。

『月夜の浜辺』
月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちていた。
それを拾って、役立てようと
僕は思ったわけでもないが
なぜだかそれを、捨てるに忍びず
僕はそれを、袂（たもと）に入れた。
月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちていた。
それを拾って、役立てようと
僕は思ったわけでもないが
月に向かってそれは抛（ほう）れず
波に向かってそれは抛れず
僕はそれを、袂に入れた。
月夜の晩に、拾ったボタンは
指先に沁（し）み、心に沁みた。
月夜の晩に、拾ったボタンは
どうしてそれが、捨てられようか？

中原中也「月夜の浜辺」テスト対策ポイントまとめ

「月夜の浜辺」テスト対策ポイント
・作者は日本の詩人中原中也
・詩の形式は「口語自由詩」
・詩は全部で6つのまとまり（6連構成）からできている。
・表現技法として「反復法」「対句法」「反語」が使われている。
・リズミカルで音読しやすい理由は、「七音（七・七調）のまとまりを多く使っているから」。
・「僕」は、拾ったボタンに対して「自分の孤独や悲しみを受け止めてくれる大切な存在」として深い愛着を感じている。
・この詩の主題（テーマ）は、「孤独や悲しみを抱える心が、ささいなもの（ボタン）に深い愛着を見出す心情」。

© ゆみねこの教科書

詩「月夜の浜辺」基本情報と詩の形式

作者	詩人の中原中也
詩の形式	口語自由詩
詩の構成	6 つの連（6 連構成）
使われている表現技法	反復法・対句法・反語

作者の中原中也さんについて

作者の中原中也さん（1907 年～1937 年）は、日本の有名な詩人だよ。
代々お医者さんの家系に生まれ、成績も優秀な「神童」と呼ばれていたけれど、8 歳の時に弟が亡くなった悲しみがきっかけで文学（詩）に目覚めたと言われているんだ。
30 歳という若さで亡くなってしまったけれど、生涯で 350 編以上もの美しい詩を残したんだよ。

詩の形式と構成

この詩の形式は、「口語自由詩」だよ。
現代の話し言葉で書かれていて、文字数に厳密な決まりがないからだね。



詩の形式の見分け表

また、詩のかたまり（1 行空いているところ）を数えると、この詩は全部で 6 つの連（6 連構成）からできていることがわかるね。テストの基本問題として出やすいので覚えておこう。

© ゆみねこの教科書

「月夜の浜辺」表現技法とリズムの工夫について

この詩には、静かで幻想的な雰囲気を作り出すための「表現技法」や、音読しやすくなる「リズムの工夫」がたくさん使われているよ。

リズムの工夫：七音（七・七調）のまとまり

この詩を声に出して読んでみると、なんだか歌のようにリズミカルで読みやすいと感じないかな？
その理由は、「七音（七つの音）」のまとまりを多く使っているからなんだ。

月夜の晩に（7音）、ボタンが一つ（7音）
波打際に（7音）、落ちていた（5音）

七つの音のセット（七・七調）が繰り返されているから、とても心地よいリズムになっているんだね。

この詩は七・七調を中心としたリズムで書かれているけれど、七五調も交じることで、単調にならず、波のようなゆらぎや余韻が生まれているんだよ。

反復法（はんぷくほう）

同じ言葉や言い回しを繰り返す「反復法」も、この詩の重要なポイントだよ。

・第1連と第3連：「月夜の晩に、ボタンが一つ波打際に、落ちていた。」

・第2連と第4連：「それを拾って、役立てようと僕は思ったわけでもないが」

このように同じ言葉を何度も繰り返すことで、寄せては返す波の音のような静かなリズムと、深い余韻を生み出しているんだね。

© ゆみねこの教科書

対句法（ついくほう）

第４連の 11・12 行目に注目してみよう。

> 「月に向かってそれは抛れず
> 浪に向かってそれは抛れず」

「月に向かって」と「浪に向かって」という、似たような形（対応する形）の句が並べられているね。これを「対句法」というよ。これによって、どこにも捨てられない「僕」の切ない気持ちが強調されているんだ。

反語（はんご）

最後の第６連に注目しよう。

> 「どうしてそれが、捨てられようか？」

これは、本当に理由を聞いているわけではないんだ。
「どうして捨てられようか？（いや、絶対に捨てられるわけがない！）」という、強い否定の気持ち（＝絶対に捨てたくないという強い思い）を伝える表現技法だよ。これを「反語」というから覚えておこう！

「月夜の浜辺」詩の情景と内容の読み解き

情景：月は「満月」？それとも「三日月」？

この詩の情景を思い浮かべてみよう。
「月夜の晩」とあるけれど、空に浮かんでいる月はどんな形をしていると思う？

浜辺に落ちている小さなボタンが見えるくらい明るい夜だから、「満月」じゃないかな？と思うかもしれないね。実はもう一つ、「ボタンと同じように丸い満月」だからこそ、月とボタンがきれいな対比（丸いもの同士の比較）になっている、と読むこともできるんだよ。

© ゆみねこの教科書

一方で、「僕の心に何かが欠けているさみしさ」を表現するために、あえて欠けた「三日月」を想像して読む人もいるんだ。詩の情景には正解が一つではないから、自分なりの景色を想像して読むのが詩の楽しいところだね。

内容：なぜボタンを捨てられないのか？

「僕」は、役立てよう（何かに使おう）と思ってボタンを拾ったわけではないと言っているね。
それなのに、なぜ「捨てるに忍びず（捨てられない）」のだろう？

第５連に「指先に沁（し）み、心に沁みた」とあるね。
夜の浜辺で拾った冷たいボタンの温度が指先に伝わり、それがだんだんと自分の心の中の寂しさや孤独に重なっていく（沁みていく）ような感覚だったんだね。

「沁みる」という言葉を繰り返すことで、そのボタンが単なる物としてではなく、僕の心に深く触れ、感動を与えた存在であることがわかるよ。
何気なく落ちていた小さなボタンが、まるで「僕自身の孤独や悲しみを受け止めてくれる大切な存在」のように感じられ、深い愛情や愛着が湧いてしまったから、どうしても捨てられなくなってしまったんだね。

捕捉：中原中也の背景と作品の関係
中原中也は、幼い息子を亡くしてしまった経験をもつ詩人としても知られているんだ。
そのため、この詩に描かれている「小さなものへの強い愛着」や「失われてしまうことへの不安」は、そうした個人的な体験と結びつけて読むこともできるよ。
けれど、この詩の意味は一つに決まるものではないので、読み手それぞれの感じ方を大切にしようね。

© ゆみねこの教科書

言葉の意味

詩の中に出てくる言葉の意味を確認しておこう。

言葉（読み）	意味
波打際（なみうちぎわ）	海や湖の水が、陸地（砂浜）に打ち寄せる境目のところ。
忍びず（しのびず）	「～するに忍びない」という言い方で、「かわいそう（または愛着がある）で、そんなことはできない」という意味。
袂（たもと）	和服（着物）のそでの下にある、袋のように垂れ下がった部分のこと。昔はここに小物を入れていたんだよ。
抛れず（ほうれず）	「抛る（ほうる）」は「投げる、捨てる」という意味。つまり「抛れず」は「捨てられない」という意味になるよ。
沁み（しみ）	「心に沁みる」というように、深い感情や感動が心の中にじわじわと染み渡っていくこと。

「月夜の浜辺」作者の思い・伝えたいこと（主題）

この詩の主題（テーマ）は、「孤独や悲しみを抱える心が、ささいなもの（ボタン）に深い愛着を見出す心情」だよ。

「僕」にとってこのボタンは、ただの綺麗な飾りとして役に立つものではないんだ。
月夜の浜辺という神秘的な空間で、たった一つ落ちていたボタン。
それは、弟を亡くした悲しみや、自分自身の孤独にそっと寄り添ってくれる「自分の分身」のように思えたのかもしれないね。

だからこそ、「どうしてそれが、捨てられようか？（絶対に捨てられるわけがない）」という強い気持ち（反語）で詩が終わっているんだね。

© ゆみねこの教科書

「月夜の浜辺」テスト対策ポイントまとめ（直前チェック用）

最後に、テスト直前の最終チェック用にポイントを絞ってまとめるよ。

・作者：中原中也（漢字で書けるように！）
・形式・構成：「口語自由詩」（6 連構成）
・表現技法：「反復法」「対句法」「反語」。
・リズムの工夫：「七音（七・七調）のまとまり」を多く使っているため、リズミカルで音読しやすい。
・同じ意味の言葉：「捨てるに忍びず」＝「それは抛れず」
・「僕」の気持ち：拾ったボタンが「指先や心に沁みた」ため、「絶対に捨てられるわけがない（強い愛着）」と感じている。
・主題（テーマ）：「孤独や悲しみを抱える心が、ささいなもの（ボタン）に深い愛着を見出す心情」。

© ゆみねこの教科書